

本日の学び:「さらなる悲劇の中に」 テキスト:創世記39章1-23節

【理解の手がかりとして】

今課のテキスト(39:1-23)を概観すると、際だって印象に残るのは「主がヨセフと共におられ」(39:2、3、21、23)である。主(ヤハウェ)は、パレスチナ地方だけでなく、エジプトにおいてもご自分が選ばれた人と共におられること、偏在(どこでも、いつでも共)なる主、その強調である。

また注目するのは、エジプトの侍従長のポティファルでさえ、主が(ヨセフと)共におられ、「主が彼のすることをすべてうまく計らわれるのを見た」(39:3)という点。ヨセフの態度と仕事ぶり、さらにその結果を見て、ヨセフが信じている神である主(ヤハウェ)がヨセフと共について彼を導き祝福していることを認めざるを得なかったのである。——これには、他宗教社会における聖書信仰に生きる者たちの振る舞いを通して神存在が認知されていく(影響を与えていく)様が表されていると思う。

驚くことに、ポティファルはヨセフを自分の個人的な秘書役とし、さらに財産管理をするまで信頼を寄せた。またそのこと(ヨセフの存在とその振る舞い)によって、主はエジプト人の家(ポティファル家)を祝福された。——ここで思い起こすのは、主がかつてアブラハムに与えた約束である。「あなたを祝福する人をわたしは祝福し…地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」(12:3)である。こうしてヨセフはアブラハムに対する主の祝福を継承しているのである。

こうして、主の祝福に生きる人は、その周りの人々に大いなる感化を及ぼし、さらにはその人々に主の祝福を分かち者となっていく、これは日本社会(家庭や職場、地域社会)の中でマイノリティーであるキリスト者においても示唆(激励)に富むメッセージである。——あらためてアブラハムへの主の祝福の言葉を心に刻もう。「祝福の源となるように」(12:2)である。

こうしてポティファルは、財産のすべてをヨセフの手に任せた。一つの例外を除いて。それは「自分が食べるもの」(39:6)についてである。その理由は、食べるものに毒が混入されることを恐れたのではないだろう(ポティファルのヨセフに対する信頼は大変厚いものと思われるので)。理由としては、エジプト人が異国人と一緒に食事をしないことに関係するらしい。もしかすれば、その食事の席にヨセフが臨席することによって妻の関心がヨセフに行くことを避けたかったのかもしれない。「ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた」(39:6)という描写がその推測を支え、また7節以降の話への伏線となっている。

7節～20節のエピソードにおける主役はヨセフではなく、ポティファルの妻である。彼女はヨセフに近づき誘惑する。しかしヨセフは大きくは二つの理由を挙げてそれを拒む。①彼女がそのポティファルの妻であり、主人ポティファルの信頼を裏切ることにはできないこと、②神に罪を犯すことになること、である。——後にイスラエル民族に与えられる十戒にこうある。「姦淫してはならない」(出エジプト20:14)「隣人の妻、…隣人のものを一切欲してはならない」(同20:17)と。

しかしポティファルの妻は諦めない。そのような誘惑が相当期間続いたことが10節から分かる。そのような日々が続いたある日のこと、彼女が実力行使に出たところ、ヨセフは着物を残して逃げることになる。この恥に逆ギレした彼女は、嘘をつく。すると当然にポティファルは怒り、ヨセフを投獄することに。

ここで意外なのは、ポティファルがヨセフを死刑に処せず投獄で済ませた点である。立場的にも厳罰が下されたはずなのに。この間にどのようなやり取りと内実(ヨセフの弁明とか、妻に対する疑心とか)があったかは想像の域である。重要なことは、この「王の囚人をつなぐ監獄に入れ」(39:20)という点。このことがきっかけになり、後にエジプト王の面識を得て、エジプトの宰相にまでなっていくことになるのだから、まことに怪我の功名、いや不思議な神の計画である。「これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える」(マタイ21:42)——このような経験、つまり一般的には悲劇と思われる出来事が、転じて神の祝

福のストーリーの一部であったと気づかされるような出来事が私たちにもあるだろう。

さて、その牢獄には、続く40章で分かるように、王に対する罪を犯した者たちが収監されていた。この牢獄は地下牢と思われる。そしてこの牢獄をあらわすヘブライ語「ボール」は、かつてヨセフが兄弟たちに投げ込まれた荒れ野の「穴」(37:22)と同じ言葉である。このようにヨセフは、かつては「穴(ボール)」に投げ入れられ、今また「地下牢(ボール)」に入れられたのである。

21-23節は、牢獄におけるヨセフの様子である。この短い記述の中に「主(ヤハウェ)」という言葉が三度も出て来る(39:21a, 23b, 23c)。たとえ牢獄の中にあっても、「主がヨセフと共におられ」(主の臨在)ることの強調である。そしてそこでも、主によって、ヨセフへの厚遇が導かれる。主はヨセフを牢獄長の目に適うようにされ、そこでもヨセフの才覚が用いられることになった。

「ヨセフは、ポティファルの家でも、牢獄に入れられた後も、それぞれのところで最善を尽くしました。渡部和子さんが言われる『置かれた場所で咲きなさい』を実践したわけです。それができたのは、主が自分と共におられて、変らぬ愛をもって見守ってくださっている、という確信があったからではないでしょうか。その確信を得たのは父ヤコブから学んだ神を心に留め、考え、日々祈ることを通してではなかったでしょうか。このような気持ちを持っていたから、ヨセフはこれらのすべてのことが神のご計画のうちにあったと確信できたのではないのでしょうか。…かつて彼を穴に投げ入れ、エジプトの商人に売った兄弟たちに、彼が次のように言う言葉からも分かります。『あなたがたは私に悪を企てましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。』(50:20)同じ事を新約聖書では使徒パウロが次のように述べます。『神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者のためには、万事が共に働いて益となるということを、私たちは知っています。』(ローマ8:28)」(加納貞彦)

『聖書教育』より

「寄る辺ない異境の地で、このような深い理解者と出会ったことこそ、『主と共におられた』しるしではないでしょうか。」(聖書の学び～狂言には狂言?)